

『東方』二八〇号より

仮面文化論の新展開

金丸良子（麗澤大学）

『神と人との交響楽——中国 仮面の世界』は、『図説 中国文化百華』第一期二〇巻の第六巻として発行された。本シリーズは中国文化を種々の学問分野から考察しようとするもので、全巻完結後には中国文化の全体像が的確に把握できることを目指したものとえよう。

とはいうものの、本シリーズの他著と同様に本書も一冊で完結した内容となっている。

著者・早稲田大学稲畑耕一郎教授は、中国古代学を専門とする研究者で、本書以外にも『一勺の水——華夷跋涉録』（二玄社）、『中国古代文明の原像 上・下』（共編、アジア文化交流協会）など既に多数の著作を世に問うておられる。近年では、中国人の研究者を交えた研究チームを組織して、貴州省を筆頭に中国各地の農山村地帯にみられる仮面および仮面をつけて行われる舞劇の調査を精力的に行っていると聞いている。本書は、その稲畑教授が実施された、中国各地の仮面および仮面劇を行う舞劇——儺戲——の調査結果をユニークな視点で集大成された書物といえる。

本書の導入部に該当する「はじめに」の中で、著者は「中国の仮面を取り上げようとするのは……（中略）……これまで中国の仮面についてあまり取り上げられてこなかったからである」（六頁）と述べ、中国では仮面研究は従来等閑視され続けてきたことを指摘する。そしてこの点こそ

稲畑耕一郎著

『神と人との交響楽——中国 仮面の世界』

A5判・二〇八頁・農山漁村文化協会・三、二〇〇円



が、本書執筆の動機となったようだ。すなわち、わが国の縁日の露店などにみられるセルロイド製の仮面ではなく、本書が対象とするような仮面および仮面をつけて行われる舞劇は、北京や上海などの先進地帯ではなく、遅れたと見なされている地域、あるいはその存在さえも正確に認知されてこなかった山村僻地に存在している。

しかも、従来中国文明を代表するものは、例えば、漢字・陶磁器・和紙・絹織物などに典型的にみられるように、中国で発明され、成熟して世界各地に伝播したものである。しかしながら、それらは、「ある意味で、昇華された特別な文明の姿」（七頁）で、広大な中国の大地に普遍的に存在してはいなかった。つまり、漢字に代表されるように、いわば炉の中で純化された文明の姿のみで、中国文明を認識する傾向が強くみられた。それに対して、著者は、あの

▼『東方』280号より
— 仮面文化論の新展開
▲ 金丸良子

クリックすると次の段にジャンプします。

広大な大地に古代から現代まで民衆の間に連綿と伝承されてきたものを通して中国をみたならば、今までとは異なった別な中国観を創造することができるのではないかと考える。このような観点から検討を試みたのが、仮面および仮面をつけて行われる舞劇なのである。

本書の構成は、

はじめに

第一章 仮面への道

第二章 出土する仮面

第三章 山野に息づく仮面

第四章 仮面劇の古層

第五章 埋没する巫祝たち

あとがき

となつていく。以下では、本文を章ごとに順を追って検討していくことにする。

第一章は、本書の導入部とも称すべき章である。「楚辞の風土」では、著者稲畑教授が仮面研究に着眼した動機が語られている。すなわち著者が『楚辞』を研究していた当時、その舞台となった土地のことを知りたく思った。そこで、該当地域の小説やエッセイを書いている小説家であり、歴史家でもあった沈従文の作品を読み出した。その作品の一つの中に「儼堂戯」に関する記述があったが、この劇は作品中に具体的に述べられていないが仮面をつけて演じられる芝居であることに気づいた。そこから、著者の中国仮面研究がスタートしたのであった。

中国では近年の調査によって、ほぼ全土に仮面劇を筆頭とする土俗的な演劇が存在することが判明し、一九九〇年

▶ トップページにもどる

に山西省臨汾で「中国儼戲学国際討論会」と称するシンポジウムが開催されることになった。そのシンポジウムの概要を紹介したのが続く「仮面劇の諸相」である。またここでは、中国仮面劇の中心と考えられる儼戲は、「本来的に祭祀と演劇とが混沌たる未分化の状態にある」(三〇頁)ことに限定して使用されるべきであるという、著者の立場が明確に述べられている。

第二章は、近年注目された仮面について、その起源を探るべく考古学の発掘調査から得られた出土例が検討される。最初の事例は、春秋から戦国にかけての曾国の君主乙(曾侯乙)の墳墓から出土した墓主内棺で、その側面に描かれていた奇妙な凶柄である。この凶柄は、亀に似て亀ではなく、獣に似て獣でない姿を呈していたので、何を描いたのか不明とされてきた。著者は、この凶柄が仮面をつけた巫祝の姿であろうと判定する。理由は、墓主が他界したとき、巫祝は遺骸を悪鬼邪霊から守護する任務も負っていた。そのため、このような恐ろしい姿に扮した巫祝が人前でみせたものなのである。つまり、仮面を着用し、鳥獣などの動物の衣装をまとうことによって、霊力を体現しようとしたのではないかと推察するのである。

このことは、『周礼』の中の「方相氏」という官職のものが、熊の皮を着用し、黄金でつくった仮面をつけていることから傍証できると主張する。さらに、同墳墓から出土した小箱の側面に描かれている演奏したり踊る人々の姿も、專業職団としての巫祝であり、仮面を着用しているという。すなわち、このような巫祝集団は、神人の交流の仲介人となることができるが、その時に仮面をつけるのである。異相の姿をすることで、より容易に俗人から聖なる世界の人へと転じることができるのであると述べる。

同様のものはさらに遡った時代においてもみることができ、四川省の三星堆遺跡から出土した青銅器類はその典型的なものといえる。すなわち、三星堆遺跡から出土した青銅器類は他の遺跡から出土する青銅器とは形状が異なり、瞳の飛び出した巨大な仮面、金箔のマスクをつけた人頭像などが造形された神か人の顔や姿をしたものがほとんどであった。しかも、つけられている仮面は青銅器という材質、大きさなどからいって実際に人が顔につけて使用したのではなく、何らかの崇拜、あるいは畏怖の対象とされたものと推定された。

つまり、これらの仮面は祭祀の対象であったか、または祀るべき偶像を仮面を通して表現したものと考えられた。ということは、三星堆遺跡の仮面は、顔面をかたどった塑像にあたるマスクイドやオーナメントとしてのマスケットに近いといえる。そうであるとすれば、この種の面具は、浙江省河姆渡遺跡を筆頭に他の遺跡からも多くの出土がみられる。その機能は、墓地に埋葬され、そこに侵入する悪鬼邪霊に対する威嚇という僻邪の性格を有していたものと推定できる。

このような僻邪的な機能を有する面具が墓地に副葬される一方では、遺骸全体を布で包み、目鼻や口耳の部分に玉を縫いつけてあるものもみられる。玉を死者の顔の部分に縫いつけるといふ習慣は、死者の魂魄が離散するのを防ぐとともに、生者に祟りのないようにするためであった。さらにその顔面には、布でつくった面衣や金属製の仮面など、身分によって異なる素材で作製された仮面がつけられていた。

以上から著者は、中国の仮面が他地域同様、二つの相反する機能を有していたと結論づける。一つは、通常いわれ

▶ トップページにもどる

ているように、顔につけることで瞬時に変身する機能であり、他の一つは、死者の仮面に代表されるように、魂魄の離散を防ぎ、悪鬼の侵入を防止することで永遠に変わらぬことを保障するものであった。つまり、仮面は変化と不変とを同時に表現するものであり、人間の生と死を一体として体現するものであった。さらに仮面には、その生と死を超越した力が存在すると、著者は指摘する。

著者は、上述の仮面がもつ力が現在各地に残っている仮面劇の中において表現されているという。その具体的な仮面劇の事例を検証したのが第三章である。本章では表に現在活動している仮面劇をまとめることで、その全国規模での分布状況などを把握した後、貴州省の道真県の仮面劇を数例詳細に紹介している。さらに、同省安順地区で演じられている「地戯」など各地にみられる仮面劇との比較も行っている。本章は、著者が実際に現地を訪問し、見聞した仮面劇を中心に論が展開されているため、非常に説得力をもつ内容になっている。

第四章は豊富な文献史料を引用して、仮面劇が考察される。主な内容は、仮面劇の誕生、仮面をつけて行われる追儺の儀式、およびそれに関連するとみなされる、天子が行う狩猟である「校獵」などがとりあげられている。

第五章は本書の結論部に該当する章といえる。顔に仮面をつけた者は、まず鬼Ⅱ祖霊として出現する。祖霊は生命の根源であり、この世の創造者、守護者であり、また破壊者でもあった。新鬼が子孫に幸福をもたらす守護霊となるには、霊を安定させる時間が必要で、その時間が経過すると、超自然的な霊力を発揮することができた。仮面が凶暴な形相をもつものに始まり、やがて福神的なものへと転化するのはそのためである。このことは、中国の仮面劇が一

- ▼ 『東方』280号より
- 四 仮面文化論の新展開
- ▲ 金丸 良子

連の葬儀の後に実施されることから推測される。
以上論じてきたように、本書は、仮面という視点から中国文明のあり方、あるいは中国というものの実態や特質を再考させようとした、注目すべき著作といえる。中国文化史に興味・関心がある読者に強く薦めたい。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる